

## 審査の結果の要旨

氏名 李 奉錫

本研究は商業集積地区活性化における文化要素の役割について理論的、実証的に考察した都市の今日的課題に対応した研究である。本研究では、「商店街などを含む商業集積地区の活性化が今までの施策とはその背景やパラダイムがどう変わりつつあるか」と、「活性化のパラダイム変化の中で、芸術・文化活動の導入に何を期待し、どう商業集積地区の活性化につなげるか」という2つの研究項目を設定して商業集積地区の活性化と芸術・文化活動の導入との関係を理論的に整理し、事例を通じて検証した。

1章では日本の経済・商業環境を巡る変化とその流れの中で既存の商店街近代化施策及び活性化対策の議論がどのように変わり、競争激化時代の中で商業集積地区活性化を巡る議論を流通学や商学文献を中心に整理している。商業集積地区の活性化議論の共通点としては、「地域の競争力」、そしてその源泉として商業集積の魅力という点に目を向けていることを指摘し、地域間の競争において、その地区、地域にしかない付加価値を作り上げ、それを管理・蓄積・発展させることが今後の商業集積地区の活性化における重要ポイントであると指摘した。

2章では商業集積地区の競争優位性の実体へ集積形成の理由や商業競争の本質の視点から迫り、集積としての競争優位性を作る可能性と課題を整理した。そして商業集積地区がそれぞれの置かれた状況、持っている資源や人材・可能性と課題をふまえて、それに対応した取組みを展開するには、マネジメント的マインドを導入して集積地区の競争優位性を見つけだすこと、そして関連取組みを持続的に推進するためのパートナーシップ組織の形成においても専門性を兼ね備えて組織に作り上げる必要があると指摘した。その上で、理論的土台として「地域マーケティング論」を取り上げ、商業集積地区の活性化施策への適応可能性を整理した。

次に商業集積地区活性化の有効な手段と見なされる「文化・芸術」の登場背景、そして活性化における役割を論じている。まず、3章で商業集積地区の競争力を向上し、活性化を図ることに「文化・芸術」から何を期待され、どのように導入されるかを文化の創造性が齎す経済的価値を重視する「文化経済学部門」と欧米の旧工業都市の経済再生経験を経て新しく登場した「都市・地域マーケティング論」部門から経験的・理論的基盤形成を試みた。

4章ではその理論的基盤から、商業集積地区の差別的優位性形成の軸を「地域オリジナリティ」と名づける。地域オリジナリティ追求型活性化戦略は大きく地域オリジナリティ形成戦略と地域オリジナリティ伝達戦略とわけることができる。そして伝達戦略はまた伝達のための実行戦略（マーケティングミックス）と伝達のためのパートナーシップ戦略に分類することができる。ここではその中でパートナーシップの面も重んじて、活性化戦略の構成を形成戦略と伝達戦略、そしてパートナーシップ形成戦略の三つの段階構成に捉えることにした。

これを受けて5章では形成手段の1つとして「文化・芸術」が果たす役割を整理、事例地区の取組を通じて実際の取組における特徴と可能性及び課題を導き出す試みを行っている。事例として、日常性中心の商業地区、非日常性中心の商業地区から活性化の方向性として日常性追求、非日常性追求に分類し、日常性追求アプローチ（日常性-日常性）の事例として経堂地区の経堂アートフェスタ、非日常性追求アプローチ①（日常性-非日常性）の事例として広尾地区のアートON、非日常性追求アプローチ②（非日常性-非日常性）として神田・日本橋地区のCETを事例として取り上げた。そして各事例地区の地域オリジナリティ形成戦略、地域オリジナリティ伝達戦略、パートナーシップ形成戦略の3つの部門においてインタビュー及び資料調査により、それぞれの特徴と課題、そして芸術・文化活動の役割を整理した。

6章では研究の結果をふまえて、「地域オリジナリティ」の形成、そして文化・芸術活動導入の取組が地域経営管理につながる可能性や重要性を提言した。商業集積地区の活性化をテーマにした今回の研究で「地域オリジナリティ」を強調することは、商店街などの既存集積地区で行われた施策で欠いていたこの集積間競争の視点を取り入れる必然性への認識がベースに存在する。そして、地域オリジナリティは作るだけでなく、それを維持管理運営（マネジメント）することに繋がる必要があると結論付ける。

この研究は商業集積地区の活性化における既存の活性化施策とは異なる概念として地域オリジナリティの概念提示を提示、その形成・蓄積・発展における芸術・文化の導入の主張し、幾つかの実例を通してその可能性を探ったことに意義を持つ。さらにそれが具体的にどれだけ地域の競争力確保に繋がったのかという評価には、本研究を踏まえて、地域内外にわたる経済的・社会的循環関係の形成、そして地域内の商業活動のイノベーション（革新）に繋がるかを見極める研究発展が必要であるとの課題を明示した。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。